

工藤 汀翠（くどう・ていすい）

1、プロフィール

中学で新傾向俳句を作り、30代で「鹿火屋」の原石鼎に師事、東奥日報社内で俳誌「辛夷花(こぶし)」を主宰。晩年の意欲は句集三巻に示される。県文化賞・県褒賞を受ける。

<生没>

1899(明治32)年3月17日 ~ 1986(昭和61)年3月11日

<代表作>

『静かな齡』『玫瑰』

<青森との関わり>

南郡碓ヶ関村に生まれる。県新聞界・放送事業などの要職に就く。県俳壇への貢献により県文化賞・褒賞を受けた。

2、作家解説

俳人。明治32年南津軽郡碓ヶ関村に生まれる。本名は哲郎。大正2年県立青森中学校に入学。同級の下条雄三(三奎城)に勧められて句作、太田清吉(耳動子)らと、俳誌「ひとみ」を刊行する。6年頃新傾向俳句にひかれ、河東碧梧桐の「碧」、中塚一碧楼の「海紅」、野辺地の「手捏(てづくね)」に投句。7年青森中学校を卒業、勤務した会社の各支社の異動の後、昭和5年東奥日報に入社。10年拒絶していた俳句をはじめ、太田耳動子の「睦月」に投句、次いで「鹿火屋(かびや)」の原石鼎に師事する。

21年社内に俳句会を興こし、俳誌「辛夷花(こぶし)」を発行する。23年以後要職の忙しさから中断していたが、32年再び「鹿火屋」に投句をはじめ、石鼎の未亡人原コウ子に師事する。34年青森県俳句懇話会の初代会長となり、第一句集『雪嶺』を刊行。

県俳句界への貢献によって 38 年青森県文化賞、40 年青森県褒賞を受けている。

45 年第二句集『静かな齡』を刊行。54 年合浦公園内に句碑建立、碑面の句は「藤だなの藤の実たるる月日かな」である。また同年第三句集『玫瑰(はまなす)』を刊行。この年懇話会会長を辞める。

61 年3月 11 日死去。行年 86 歳。「感じを誇張」せず「目前些事をさかまへて来て」「心持の深い句を作る」という石鼎晩年の主張は、第三句集『玫瑰』の竹内俊吉の序の文に通うものがある。この 61 年の暮れ遺句集『二月の顔』が刊行された。

3、資料紹介

○『静かな齡』

図書

1970(昭和 45)年2月 11 日

182mm × 128mm

昭和 45 年2月 11 日発行。工藤汀翠の自選 400 句(第1句集『雪嶺』34 年刊行以後 44 年までの句)を収める。発行所は鹿火屋会。序は原コウ子・竹内俊吉。巻末に略年譜、著者自身のあとがきを載せる。